

# 横浜善光寺留学僧育英会十年の歩み

理事長 黒田武志

## 横浜善光寺留学僧育英会

(旧称善光寺海外留学僧派遣育英会)

### の趣旨及び目的

昭和四十四(一九六九)年、横浜日野公園墓地の近くに善光寺を開創した私は、その経営基盤のほぼ確立した開創十五周年を記念して、昭和五十九(一九八四)年一月十五日、「善光寺海外留学僧派遣育英会」を設立した。その設立趣意書には次のように設立の趣旨が述べてある。

(前略) いまや人類は宇宙時代に入り、時間的にも空間的にも距離は著しく短縮され、世界はあたかも一国の観を呈しておりますが、反面、人類はかつてない不安と絶望の危機に見舞われております。これは明らかに現代社会の悲劇であり、今日ほど佛陀釈尊の教法宣布を必要とするときはないのであります。しかるに、わが国は世界最大の佛敎国でありながら佛敎界は遺憾ながら、世界の大勢に即応して教化の実を挙げる態勢に欠けており

ます。ここに海外生活を通して広く世界に活眼を開く人材育成の重要性を痛感するものがあります。

よって善光寺は開創十五周年を期して報恩行の一端として、海外に留学僧を派遣し、人材の育成をはかり、もって、佛教を振興し、世界の平和、人類の進運に寄与せんことを願ひ、海外留学僧派遣育英会を設立するものがあります。

右の趣旨にもとづき、「大学卒業相当以上の学力を有し、佛教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして身心堅固なるものを海外に派遣し、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とし、その目的達成のため、海外に留学僧を派遣すると共に、目的達成のために必要なる事業をおこなう（「宗教法善光寺海外留学僧派遣育英会規定」第三

条、第四条）ことになった。

### 育英会設立の動機、理由

「宗祖を通して釈尊に還る」というのが私の学生時代からの信念だった。

この信念に駆り立てられ、私は大本山總持寺特別僧堂、大本山永平寺僧堂安居を了えて直ちに佛舍利奉拝日本一周行脚を実施し、続いてインドに赴き佛蹟を参拝し、帰途バンコクにとどまり、上座部佛教比丘として九旬安居を修し、さらにはロスアンゼルス の禅センターに飛び、二年間開教師として欧米人の参禅指導に当たったが、この間にいただいた尊い佛縁がその後の私の、人間形成の土台になったことを思い、この尊い佛縁を私以外の若人にも味わってもらいたいし、その機会提供に協力したいものだというのが、かねてよりの私の念願で、これが育英会設立の根本の動機である。

ついで思い起こせば今から十七年前、『仏教タ  
イムス』の主催で、その頃よく「国際禅苑」と  
いわれた大本山總持寺の海外布教に関する座談  
会が開かれた。その席で私は南方上座部佛教と  
の交流の必要性を強調し、本山の修行僧をタイ  
国に派遣し、上座部佛教の比丘としての修行を  
経験させてほしいと提案した。さいわいそれが  
採用となり、翌年、三名の雲水がワット・パク  
ナムに派遣された。しかし有史以来はじめての  
この試みは、わずか三回で沙汰止みとなってし  
まった。その時私は、「これは人頼みでやれる仕  
事ではない。独力でやるしかない。近い将来、  
是が非でも実現しよう」と心に誓ったのだが、  
さいわい予想より早く機が熟し、十年前に育英  
会設立の運びとなった。

### 歴史的経過

昭和五十九(一九八四)年一月十五日、善光寺

海外留学僧派遣育英会の設立準備委員会が開か  
れた。委員は、東隆眞、黒田俊雄、佐藤俊明、  
鷺見透玄、中村治雄、奈良康明の顔ぶれである。  
(五十音順、敬称略)

まず私が、海外留学僧派遣の発願趣旨とこれ  
までの経過について述べ、各委員を紹介した。  
ついで、佐藤委員が設立準備委員長となり、私  
が基金を贈呈し、議事に入り、設立趣意書、規  
定、細則等を審議し、最後に役員の構成、委嘱  
について意見が交換された。(設立準備委員はそ  
のまま理事に就任。)

この年一年間を準備期間とし、秋に本山僧堂  
及び地方僧堂、佛教乃至宗教に関する学部を有  
する二十有余の大学に募集要項を発送した。こ  
うして翌昭和六十(一九八五)年度より、海外に  
留学僧を派遣して今日に及んでいる。派遣僧関  
係国、人数及び派遣先は次の通りである。なお  
派遣は原則として一年間、特に必要と認められた場

合は再派遣している。

○留学僧派遣国及び受け入れ国とその内容

(第一回～第十回)

派遣僧 56名(継続及び二カ国への派遣を含めると68件)

関係国 15カ国(1地域)

派遣国(11カ国)と内容

アメリカ10名 タイ10名 インド4名 ス  
 リランカ3名 イギリス3名 イタリア1  
 名 フランス1名 韓国1名 カンボジア  
 1名 オランダ1名 ドイツ1名

受け入れ国(8カ国、1地域)と内容

アメリカ1名 スリランカ1名 フランス  
 1名 中国2名 日本31名 韓国11名 バ  
 ングラデシュ1名 タイ1名 台湾2名

(平成六年八月現在)

○育英金支給金額について

・派遣の場合 欧米等は原則として、単年度百

万円に往復の旅費を支給する。ただし、アジア圏内、インド等は随時検討する。

・受け入れの場合 原則として単年度六十万円を支給する(月額五万円)。

育英資金を支給されたものは、いかなる義務束縛も負わない。

なお、第一回派遣僧の帰国、第二回派遣二師の休暇帰国を機に昭和六十一年八月二十八日、第一回総会を開催して以来、毎年回を重ね今日に至っている。

次に十年の歩みの中で特筆すべき事項を摘記する。

一、昭和六十二(一九八七)年十二月八日、上智大学アジア文化研究所とフランス・パリ第七大学主催による第二回日仏セミナーがパリ第一大学において開催された。出席要請を受けた私は「新しい寺院経営を求めて」というテ

一、マのもと一時間講演をした。草稿はほぼ全文が『中外日報』に掲載された。

二、なお、この年より、私と佐藤常務理事と二人連れてインドを振り出しに関係各国を歴訪し、今日まで次の十カ国を訪問した。

インド、スリランカ、マレーシア、タイ、ミャンマー、カンボジア、中国、台湾、韓国、アメリカ。

三、昭和六十三（一九八八）年、タイ国ワット・パクナムより釈迦牟尼佛の尊像が寄進された。そして四月二日ワット・パクナム住職を招き、子息四人が善光寺において得度の式を挙げた。

四、平成元（一九八九）年八月二十九日第四回総会において、細則中、これまで海外留学僧の派遣先がタイとアメリカに限定されていたが、要望に鑑み、新たに「理事会において必要と認めるその他の国に所在する研究機関」の一項を加えた。さらに、留学僧の受け入れ先か

らの要請もあり、また今後の推移を考え、第十一号として「必要に応じ海外留学僧を講師として受け入れ先に派遣する」との規定を設けた。なお、翌平成二年の総会において、留学生のうち、大学の教授、助教授クラスは育英会の講師とすると決められた。

五、平成三（一九九一）年十二月八日『善光寺海外留学僧派遣育英会論文集』第一集が刊行された。また、育英会の発足にそなえて、育英会設立の一年前に『成寿』の発行を企画し、爾来年二〜三回発刊し、今日までに二十五卷（特別号三卷を含む）を数えており、留学僧に関する記事はその都度同誌で報告している。

六、平成五（一九九三）年二月六日の第八回総会において、「善光寺海外留学僧派遣育英会」の名称が「横浜善光寺留学僧育英会」に変更になった。

七、新名称決定と同時に、名誉顧問八名、顧問

二十四名、理事九名、監事二名、参与六名が委嘱された。

### 現状に至る辛苦と将来への抱負

宗務当局や本山ならいざ知らず、一寺院が海外に留学僧を派遣すること、また、宗派にこだわらず、国籍も問わず佛教の勉強をしていただくという育英事業は、恐らくはじめてのことであらう。それだけに当初はいろいろな誹謗中傷などを受けた。

「石の上にも三年」と言われるが、十年を経過した今日、それらはあまり聞かれなくなり、ようやく認められてきたかという感を抱く昨今である。また、この大事業を実行するにあたり、私は檀家の方々に「食事ごとに一口だけ食べ物を減らして協力してください。それで佛法をひろめたい」とお願いした。そして檀家の方々はよく私を支えてくれた。

〃法輪転ずるところ、食輪おのずから転ぜらる〃ことを私は確信している。これが佛天の御加護ならば、援助してくださる檀家の方々はまさしく佛そのものである。〃檀越を敬うこと佛のごとくすべし〃という瑩山禅師の教えをひたすら実践したことが留学僧育英会の今日をあらしめたものと信ずる。

一昨年、第四回生のバシユー・ルース浄心さんが南フランスに禅堂を建てて開単した。「桃栗三年、柿八年」というが、育英会のタネが蒔かれて八年にして、柿の実が遠い国フランスに結実したことはまことにうれしいことである。そして昨年は、第八回生の韓仁徹氏がアメリカのフィラデルフィアに観音寺を建立した。

また昨年六月、第三回生の李幼麟氏を案内役として中国を訪問して、大きな成果を収めたが、これは李幼麟氏の語学力、人脈、そして人柄に負うところがきわめて大で、善光寺留学僧がそ

の力量を育英会のために發揮してくれた尊い成功例である。また、多くの留学僧に今後のグロ―バルな活躍を期待する。

### 十周年記念事業について

本年は横浜善光寺留学僧育英会十周年に正当するので、次の二記念事業を企画した。

- 一、記念式典 三月三十日善光寺において開催
- 二、記念出版

『法燈の国際化をめざして』

『留学僧論文集』第二集

### 日本佛教の国際的・現代的使命と

#### 育英会

わが国に佛教が伝来しておよそ一千五百年、その歴史は遠く永い。インドに発して中国大陸、朝鮮半島を経由して日本に定着した佛教は、日本の文化・生活・伝統の基礎として決定的な役

割を果してきた。

日本佛教は、思想的には平安時代の天台、真言の両宗に見られるような哲理の頂点をきわめ、実践的には親鸞、道元ら鎌倉佛教の祖師たちによって信仰生活の典型が示されている。そして、われわれは、いまその恩恵に浴している。冒頭にも触れたように、わが国は世界最大の佛教国である。しかし、日本の佛教徒は、日本の佛教こそ、ないしは所属する宗派の教えこそ、唯一絶対最高の佛教であるとおごり錯覚している部分がありはしないか。私は、ささやかな海外佛教の視察、研修の経験を通じて、そのことを痛感している。曹洞宗の私たちがよく使う「正法の佛法」ということばの真の意味するところはなんであるかということ、新しい二十一世紀の国際社会を展望しながら、みずからに問いかけたいのである。

さて、また、日本の佛教は社会的実践力に欠

けると非難されることがある。この批評で日本佛教の各宗派の現状をおおいつくすのは誤りである。現に曹洞宗には、児童福祉事業の藤本幸邦老師や曹洞宗国際ボランティア会の活動が国際的にも知られている。

しかし、日本の佛教は社会的実践力に欠けるという非難を、私は率直に甘受したのである。私は、もとより無能・無才であるが、私なりに、み佛のお加護のなかで、脚下を反省し懺悔しながら、その使命と責任を果したいと念願してきた。

日本の佛教徒の社会的実践にはなにかがあるか。立場により、考え方によって、いろいろのことが考えられよう。私は、新しい時代をなう国際的感覚豊かな佛教徒の登場、そのための人材育成すなわち育英事業こそもっとも重要かつ緊急を要することがらだと確信している。佛法の興廃は人にありという先哲の古語は、不滅の真

理であろう。

私は、私どもの育英会について広くご理解とご協力をいただきたいと願っている。しかし、育英会の運営を進めるにあたって、周囲にご迷惑をおかけしたり、人さまに負担を無理強いる気は毛頭ない。

これからどこまで続けられるか。永遠の彼方を見つめながら、マイ・ペースで進んでいくのみである。

